

朋友だより

今年も年の瀬を迎える頃となりました。

今回の朋友だよりはアメリカの出版人、シフリンの自伝をご紹介します。含蓄のある文章が多いので、できるだけ本文を収録しました。20世紀後半のアメリカ社会の変容の様子がよくわかります。ご参考になれば幸いです。

2012年12月

(有)コンサルタント朋友
代表取締役 奥長弘三



ある出版人の自伝を読む



生い立ち

アンドレ・シフリン著『出版と政治の戦後史 - アンドレ・シフリン自伝 -』(訳:高村幸治 (株)トランスビュー発行 2012年9月)を興味深く読みました。出版人の目を通して20世紀後半のアメリカ社会の変貌が鮮やかに記されています。

著者はフランス生まれ、1941年夏、一家はアメリカに亡命します。父親は同じ亡命者が創設したパンセオン社に合流して共同編集者となり、良質の出版活動に従事します。そうした環境に育った著者は小さい頃から政治に目覚めます。イエール大学を最優等で卒業したあと、英国ケンブリッジ大学に留学、優秀な成績でMA(修士)を取得します。1962年パンセオン社(父親が築き上げた職場)への誘いを受け、編集者としての道を歩みます。

ケンブリッジ留学以降に知り得たヨーロッパの優れた知性とその著作を次々にアメリカに紹介、また逆にアメリカ人の優れた著作をヨーロッパに紹介するという大西洋の両側における知の共同体の創出に大きく貢献します。

しかし、アメリカ社会の保守化、新自由主義化の波が出版界にも押し寄せ、パンセオンも大きな変化に見舞われます。同書第7章「変質する出版界」、第8章「活路はどこに」に当時の様子が生々しく語られています。本文を引用しながら、その跡をたどります。

20世紀後半アメリカの変容

イギリスは、様々な商品や新しい考えを生み出すところではなく、マネー作りのための金融センターとなってしまった。イギリスのマスメディアもまた変質した。最初は印刷メディアから始まり、次々テレビがとどまることを知らないまでに低俗化し、政治的には極端かつ無茶苦茶なものになってしまった。そうした変化をもたらしたのが、ルパート・マードックだ。彼の率いるニュース・コーポレーションはイギリスのいくつかの主要紙を支配下におさめること

に成功する。(同書 P.268-9)

あっという間にマードックは合衆国内で政治的影響力を行使し、いかなる会社も同一都市内でテレビ局と新聞社を所有することが出来ないと定めたFCC(連邦通信委員会)規定の除外措置の獲得に成功する。(中略)われわれ出版業に携わるものが、自分達を取り巻く政治的な危険に重大な関心を寄せられていながら、まさに自分達の分野においても、これと同じ現象がすぐにも起こるであろうことを予測しそこなったのは皮肉なことである。(同書 P.270)

著者が勤務するパンセオンの親会社ランダムハウスのオーナー、ベネット・サーフは経営に行き詰まり、困難が著者の近辺に押し寄せるようになります。

数年もしないうちに、ベネット・サーフたちも同じジレンマに直面し、エレクトロニクスの巨大企業RCAに新しく大きくしたグループごと、身売りせざるを得なくなる。(中略)最も重要なのは社(ランダムハウスのこと)が目指すものそのものが変質してしまったことだった。利益が唯一の目標となった。ランダムハウスがどんな本を出すかは、どうでもいいことだった。企業全体の収益構造の中で、どれだけ貢献できるかが問題だった。(同書 P.272-3)

マッカーシーの時代は終わったはずなのに、利潤の最大化という新しいイデオロギーに対する闘い、どんな本もすぐに利益を出さなければならないとする主張との闘いは、新しい形の転覆行為だとみなされ、マッカーシー時代と同じように攻撃され、多くの中傷や圧力にさらされた。(同書 P.287)

パンセオンから解雇、新出版社設立

この流れの中でシフリンはパンセオンを解雇されます。大出版社が彼がこれまでやってきたことをやらせてくれる可能性がないと判断した彼は、1994年にニュープレスという小出版社を創立し、今日なお、質の高い書籍出版の先頭

に立ち続けています。

新聞や放送メディアがより重要な役割を果たすのは確かだが、書籍出版もまた決定的な役割を担っている。書籍は執筆者に緻密な議論を展開する時間と空間を提供することが出来る。また他のメディアに対してもより深く突っ込んだ新しい情報を提供することができる。書籍はもっとも広範囲に一般の人々に対して、主流のメディア自体からは生まれてこない違った考え方や反対意見を届ける理想の手段なのだ。

いま一度確認しておかなければならないが、重要なのは、コングロマリット支配の網の目に絡め取られない立ち位置を確保することだ。(中略) 今日、希望の星は、会社として正式な手続きを踏んでいるかどうかはともかく、新興の、概して利潤追求を旨としない小さな独立系の出版社である。(同書 P.302-3)

自分自身の最近の経験や仲間の経験から間違いなく言えるのは、鯨に呑み込まれるよりも、鯨の外にいるほうが、はるかにましであり、幸せに生きられるということだ。(同書 P.322)

訳者、高村幸治氏は「訳者あとがき」で次のように述べています。

著者が現代アメリカの重大な変質として批判的に論じているのが、新自由主義という金儲け主義むき出しのイデオロギーであり、コングロマリットによる経済社会の支配とグローバリズムのもたらす重大な弊害である。とくにテレビや新聞などのメディア支配が出版界にまで及んでいる最近の状況に対する批判は、現代資本主義の本質と限界を突いて痛烈である。

出版人としてのシフリンの生涯は、自由を賭けた闘いであったと言える。シフリンにそうした生き方を選ばせたものは、フランスとアメリカという、二つの異質な文化と歴史を背負う彼の二重性にあっただろう。そうであるからこそ、シフリンはアメリカ社会を常に相対化して捉える複眼的な眼差しを、持ち得たのだ。(同書 P350-1)

新自由主義との闘い

シフリンは自分の闘う相手を明確に認識していました。しかし一般には、このことは容易なことではありません。自分が闘う相手の真の姿がわからないことが多いのが、この世の中です。

先に引用した様にシフリン自身、「我々出版業に携わるものが、自分達を取り巻く政治的な危険に重大な関心を寄せていながら、まさに自分達の分野において、これと同じ現象がすぐに起こるであろうことを予測しそこなったのは皮肉なことである」としています。

このことは私達のまわりによくあることです。自分達を困難に落としつけている相手の本質を見抜く力をつけることは大切です。

私達はともすると、国民や中小企業を困難にさせているものは自然現象のように止むを得ないものと思い込んでしまう嫌いがあります。

私達の困難を切り開く鍵は、新自由主義の弊害にきちんと目をむけること、そしてそれに対抗する勢力としての独立系中小企業の発展に力を注ぐことでしょう。この点シフリンが新自由主義との闘いを続けつつ、小出版社を立ち上げ、良質な本の出版活動を続けていることは大変、興味深いことです。

大手の支配下に入らず、独自の企業活動を続け、真に顧客が求める良質な商品・サービスの提供を続ける姿勢は、私達が求めるものと完全に一致しているといえます。



